

『ポーランド農民』における第一次集団論 (その3)

高 山 龍太郎

前稿、前々稿¹⁾において、トマスとズナニエツキ著『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(以下、『ポーランド農民』と略)の第一次集団論序論を詳しく見てきた。そこでは、家族を単位とする等質的・固定的な社会から、個人を単位とする異質的・流動的な社会へという変動過程が、様々な角度から検討されていた。家族に代表される伝統的な第一次集団は、相補的な援助に基づく「連帯」によって特徴づけられる。その成員は、見返りを求めずに互いに犠牲を払って助け合い、完全に集団の中に埋没していた。しかし、こうした伝統的な第一次集団は、移民による社会圏の拡大や産業経済などの影響によって、次第に解体していく。その結果、集団の統制に従わない自己本位的な個人が析出されていった。

本稿では、以上のような第一次集団論序論の基本的枠組に従い、ポーランドの農民家族と、アメリカに渡った家族員との間で交わされた手紙の分析を見ていく。前々稿²⁾において、『ポーランド農民』には、「抽象度の高い形式主義的な方法論のレベル」「農民の近代化を扱ったより実質的な理論のレベル」「資料のレベル」という三つのレベルが想定できることを指摘した。本稿は、その「資料レベル」を扱うものである。そこには、急激な社会変動期における農民たちの生活が、生き生きと表れている。

手紙分析の概要

手紙の分析は、約800頁にわたる。まず、「農民の手紙の形態と機能」(13頁, p.303-15)³⁾では、トマスらによって、手紙の類型が簡略にまとめられている。

引き続いて、合計764通におよぶ農民たちの手紙が、799頁（p.316-1114）にわたって、50組の家族ごとに収録されている。手紙の書き手は、ポーランドの様々な地方に暮らし、自作農や小作農、都市の農民労働者など多彩であり、年齢・性別も様々である。

さらに、この家族ごとの手紙シリーズは、「家族集団の成員間の往復書簡」（498頁，p.316-813）、「家族的連帯の分解を示している個々の手紙と手紙の断片」（8頁，p.814-21）、「夫婦間の往復書簡」（137頁，p.822-958）、「夫婦と家族以外の個人的関係」（156頁，p.959-1114）の四つに分類されている。第一の「家族集団の成員間の往復書簡」には、ポーランドの家族から渡米した家族員へ宛てた手紙や、アメリカにいる家族員同士の手紙のやりとりを通じて、彼らの持つ旧来の価値観とその変化、さらに変化に動揺したり適応したりする彼らの姿が見て取れる。第二の「家族的連帯の分解を示している個々の手紙と手紙の断片」では、ある家族員の移民によって引き起こされた家族的連帯の分解が例示される。家族的連帯を失った家族員は、容易に道徳的退廃を引き起こす。第三の「夫婦間の往復書簡」では、研究の焦点は、核家族に移る。ポーランド農民は、伝統的に4～5親等の親類を含む拡大家族を形成していたが、社会条件の変化によって、拡大家族の機能は分化し、その分化した機能は、地域的集団や職業的集団、時には、民族的集団・宗教的集団に組み込まれていく。夫婦関係と親子関係も、この変化の影響を被り、相互的な私的愛情の規範によって結ばれるようになる。最後の「夫婦と家族以外の個人的関係」では、友人関係という私的關係の変化が、家族関係の変化と比較される。ポーランド農民の伝統社会では、家族関係は、友人関係よりも優先されていた。しかし、拡大家族の分解によって、友人関係が促進される一方で、相互的な私的愛情に基づく核家族の成立が、友人関係を阻害しもある。

以上のような内容を持った50家族の手紙シリーズには、それぞれ直前に、トマスらによって、各家族の特徴と簡単な家族構成図が記述されている。さらに、各々の手紙には、脚注による考察が加えられている。また、手紙の本文は、彼

らの判断によって省略や要約がなされている。これらの手紙の収集方法について、トマスらは、本の中で明確に述べていない。実証的な社会学の成立を検証したマジジ⁽⁴⁾によれば、彼らは、雑誌広告で手紙を収集したという。1914年11月のポーランド系アメリカ移住者向雑誌『Dziennik Zwiazkowy』に、移民たちの受け取ったポーランドからの手紙に、1通あたり10から20セント支払い、後ほど返却するという広告を掲載した⁽⁵⁾。この事実が初めて明らかにされたのは、出版から20年後の1938年に開催された『ポーランド農民』の方法論を検証した会議においてであったという⁽⁶⁾。手紙は、シカゴで収集されたため、ポーランドからアメリカへ送られたものがほとんどである。したがって、厳密には、ポーランド-アメリカ間の手紙のやりとりとは言えない。また、実際に収集された手紙の数は、本に収録された数より多いと思われる。しかし、本への収録基準は不明である。さらに、識字率を考慮に入れば、階層の高い農民の手紙が多く収録されていると思われる。当然、手紙の原文はポーランド語であろう。著者の一人であるポーランド出身のズナニエツキが、これらの手紙を英語に翻訳したと思われる。

本稿では、特に第一の「家族集団の成員間の往復書簡」から、Markiewicz家の手紙シリーズ(p.455-526)を取りあげる。この家族を取りあげる理由は、収録されている手紙シリーズ中最大の72頁という資料的厚みを持っており、さらに、家族の連帯を重んじる伝統的な農民態度と、個人の立身出世を重んじる新しい中流階級態度の対照が、典型的な形で現れているからである。

それでは、早速、トマスらによる手紙の類型、次いで手紙の紹介の順で、本文を見ていこう。

農民たちが交わした手紙の形態と機能

ポーランド農民たちは、長い手紙をたくさん書いている。農民にとって手紙を書くことは、熟考の苦痛と時間の犠牲を必要とするので、大変に困難なはずである。それにもかかわらず、農民が手紙を書くのは、手紙が儀式的な性格を

持つ一種の社会的義務だからである。(p.303)

すべての農民の手紙は、「会釈的な手紙」(bowing letter) という基本類型の変形と考えることが出来るという。こうした会釈的な手紙は、家族的連帯の持続を表すために、家族のもとを離れている家族員と家族の間でかわされる。以下は、会釈的な手紙の典型例である。(p.303)

1 番⁷⁾, Perth Amboy, ニューヨーク, 1911年8月11日 (p.309)

最愛の両親よ、私の手紙の最初の言葉において、「イエス・キリストを誉め讃えよ」という神の言葉で、私たちは挨拶します。私たちは、あなた方が、「いつまでも、アーメン」と答えてくれることを望んでいます。

そして、今、私たちは、あなた方に、私の健康と成功についてお知らせします。神の寵愛のおかげで、私たちは、順調です。私たちは、あなた方も順調であることを望んでいます。最愛の両親よ、私たちは、このことを心の底から願っています。そして、私たちが、あなた方の手紙を受け取ったことをお知らせいたします。その手紙には、私たちが健康であることが書かれていました。それは、私たちが、あなた方に願っていることです。ところで、そちらの天候はいかがでしょう。なぜなら、こちらでは、今年の夏、太陽が110度の暑さになり、多くの人びとが亡くなったからです。さて、最愛の父、最愛の母よ、私は、あなた方の手と足にキスをします。私は、あなた方との会話を終わりにします。神とともにあれ。あなた方の健康に神の加護がありますように。そして、私があなた方に会えますように。最愛の両親よ。

さて、最愛の姉よ、私は、あなたにご挨拶します。最愛の義兄よ、私は、あなたにご挨拶します。私は、あなた方の幸福と健康と成功を願っています。あなた方が神から願うものと同じものを、私は、夫とともに、あなた方に願います。さて、叔母Dorutaよ、兄Aleksanderよ、Jozefよ、祖母よ、私は、あなた方の健康と成功を願っています。あなた方が神から願うものと同じものを、私は、あなた方に願います。最愛の祖母よ、最愛の兄よ、最愛の姉よ。さて、義兄Moscenskiよ、姉Adela

よ、私たちは、彼らにあらゆる種類の成功を願っています。彼らが神から願うものと同じものを、私たちは、彼らに願います。さて、Doborkoski一家に、私たちは、深々とご挨拶申し上げます。義兄、姉、子どもたちよ、私たちは、幸福と健康と成功を願っています。彼らが神から願うものと同じものを、私たちは、彼らに願います。さようなら。

さて、私、Stanislaw Pienczkowskiは、私の妻の両親にご挨拶申し上げます。私は、あなた方に、私の健康についてお知らせします。最愛の両親よ、神の寵愛のおかげで、私は、順調です。私は、あなた方も順調であることを望んでいます。そして、最愛の両親よ、私は、あなた方にお尋ねします。なぜ、手紙を書いてくれないのですか。1週間前、私は、Nowicki一家に手紙を送りました。彼らは、手紙を受け取りました。私は、手紙を受け取ることを、長くは待てません。したがって、最愛の両親よ、私はあなた方に返事をより早く書いてくれることをお願いします。

[署名なし]⁽⁸⁾

家族的連帯の表明という機能にしたがって、会釈的な手紙の構成は、きっちりと規定されている。まず、宗教的な挨拶から始まる。宗教的挨拶は、呪術的には、悪を防ぐ意味を持ち、道徳的には、手紙の送り手と受け手が同一の宗教的共同体に属することを示し、また、道徳的宗教システムの観点からは、あらゆる共同体が宗教的であることを示す。この宗教的挨拶に続いて、神の加護による健康や成功など送り手の近況が書かれる。そして、健康と成功が、受け手や残りの家族にももたらされるようにと綴られる。手紙の最後には、すべての家族員に対する挨拶、別居した家族員に宛てた手紙ならば、すべての家族員からの挨拶、すなわち「会釈」(bows)が書かれる。これらの要素は、手紙の機能が複雑になっても、あらゆる手紙で残っている。(p.304)

会釈的な手紙は、元来の機能を持つ唯一の手紙である。それ以外の家族員間の手紙の機能は、単に、家族員間の私的・直接的コミュニケーションの代わりにすぎない。この代替的機能の性質にしたがって、家族の手紙は、五つに分類

される。しかし、これらの各類型も、基本的には、家族的連帯を示す会釈的な手紙である。(p.304-5)

1「儀式の手紙」(ceremonial letters) — こうした手紙は、結婚式・洗礼式・葬式など、通常、家族員全員の出席が必要とされる家族の行事に対して送られ、本来すべきである儀式のスピーチの代わりとなる。この手紙の機能は、家族的感情を復活させる集まりやスピーチの機能と同一である。(p.305)

2「近況報告の手紙」(informing letters)——会釈的な手紙は、実際に会ったときに話すために、詳しい近況を書かない。しかし、しばらく会えない場合には、手紙が、こうした機能を、代替的・暫定的に果たさなければならない。このようにして、家族における関心の共有が維持される。(p.305)

3「感傷的な手紙」(sentimental letters)——原始的・半本能的な家族的連帯が、別居の結果として弱まるならば、感傷的な手紙は、儀式とは無関係に、家族的感情の復活という課題を負う。(p.305)

4「文学的な手紙」(literary letters) — 農民は、通常、自分の審美的関心を、音楽や歌、詩の独唱の形で表現することが多い。不在のために、家族のそうした楽しみに参加できない農民は、代わりに、韻文で手紙を送る。そうした手紙は、人前で読まれるので、虚栄心を満たす一種の娯楽となる。(p.305-6)

5「仕事の手紙」(business letters) — 可能な限り、農民は、相手に直接会って仕事をしようとする。仕事に手紙を用いるのは、別居の期間が長く、距離があまりにも離れている場合に限られる。(p.306)

家族集団の成員間で交わされた往復書簡

家族員間で交わされた手紙を分析するねらいは、一つ目に、家族を取り巻く状況と、二つ目に、その状況に対する家族の適応を明らかにするというものである。

これらの手紙は、まず、農民たちの多様な態度を提示している。さらには、さまざまな生活状況で家族集団が直面する諸問題との関連において、原初的な

家族組織を明らかにする。こうした生活状況は、一方では、家族員の誕生・成長・結婚・死など、家族組織が原初的に適応している通常の内的・外的な過程や出来事によって決定される。その一方で、教育の増大、新しい考え方の浸透、経済的・社会的な進歩、職業の変化、都市やアメリカやドイツへの移民を介した社会環境の変化、ロシアやドイツなど隣接する諸国との接触などのように、家族組織が原初的に適応していない新しい志向性や新しい外的影響によっても決定される。(p.316)

トマスらは、このような性格を持つ手紙を、次の二点を提示するために配列している。一つには、「家族集団や家族員が自分たちの周りに見いだしている支配的状況」であり、もう一つは、「家族集団の漸進的な分解」である。(p.316)

Markiewicz家の手紙シリーズ

家族の特徴

ここで取りあげるMarkiewicz家は、農民貴族（peasant nobility）という階級に属する。農民貴族は、かつて政治参加の権利によって他の農民から区別されていた農民の中で一番上の階級である。Markiewicz家は、プロック州との境界に近いワルシャワ州Vistula付近に住む。この地域は、新興の家族が多く、産業はほとんどない。だが、文化的影響を強く受け、知的運動の中心地である。(p.455)

Markiewicz家の家業は、農業である。牛・馬・豚・家禽類などを飼い、小麦・ライ麦などの穀物の他、エンドウ豆・ジャガイモ・果物なども栽培している。また、収穫した麦を粉にひく風車小屋や小さな店を所有している。したがって、経済的にかなり裕福である。

Markiewicz家の人びとは、基本的に、「立身出世者」（climbers）である。そのため、社会環境における生活の進行は、他の家族よりも、かなり速い。この立身出世という点から見ると、Markiewicz家における、家族の状況全体、古い世代と若い世代の相違、個々人の性格やアスピレーションの相違をよりよ

く理解できよう。このMarkiewicz家の事例は、農民たちの上昇志向の変化を典型的に示す。伝統的な農民は、自分たちの属する階級「内部」での上昇を目指した。一方、Markiewicz家の人びとは、自分たちの属する階級を抜け出て、より上位の階級に属しようとする。こうした状況は、ポーランド社会における中流階級と下層階級の一般的状況を代表している。当時、一つの家族のなかに、固定された家族の階級に付随する伝統的な社会的性格と、流動的な個人の階級に付随する新しい社会的性格が、さまざまな比率で混在していた。(p.455-6)

それでは、Markiewicz家の成員一人一人の特徴を簡略に見ていこう。Markiewicz家は、JozefとJanの二つの核家族から構成されている（図1を参照）。JozefとJanは、兄弟である。

Jozefには、3人の息子と4人の娘がいる。一方、Janには、5人の息子と3人の娘がいる。Jozefの家族とJanの家族は、互いに独立しており、居住も、別々のようである（手紙149番，p.468-9）。同じMarkiewicz家ということで、協力し合う様子は、手紙からは見いだせなかった。JozefとJanは、自分の家族の社会的地位について互いにライバル意識を持っている（手紙161番，p.479）。

JozefとJanは、典型的な農民である。自分たちが属する階級内部での上昇を試みる彼らは、自分の子どもたちが、自分たちの階級

を抜け出て、より上位の階級へ上昇しようすることを理解できない。Jozef

図 1
THE FAMILY MARKIEWICZ

Józef Markiewicz	
Anna, his wife	
Wacław (Wacio, Wacek)	} his sons
Stanisław (Staś, Stasiek, Stasio)	
Alfons	
Elżbieta (Elżbietka, Bicia)	} his daughters
Pecia	
Polcia (Apolonia)	
Zonia (Zosia, Zofia)	
Franuś (Franciszek), Pecia's husband	
Grandmother (probably Anna's mother)	
J. Przanowski, probably Anna's brother	
Feliks } probably Anna's brothers; perhaps	
Antoni } cousins of herself or husband	
Maćkowa, cousin of Józef or Anna	
Teosia, daughter of J. Przanowski	
Wacek, Teosia's husband	
Maks, son of J. Przanowski	
Jan Markiewicz, Józef's brother	
His wife	
Maks (Maksymilian)	} his sons
Staś (Stasio, Stanisław)	
Wiktor (Wiktorek)	
Michał	
Ignac	
Weronika	} his daughters
Julka	
Mania	
Grandmother (probably mother of Jan's wife)	
Ziółek (Ziółkowski), her husband	
Jan Ziółek, the latter's son by his first marriage	
Ziółek's sister	

Other relatives in Poland, in America, in Prussia, in Petersburg.

Thomas and Znaniecki 1918-20 : 461-2

とJanの望みは、自分たちの家族が、共同体の内部で高い地位を占めることである。すなわち、彼らの上昇の単位は、個人ではなく、家族である。こうした考え方は、その他の家族員との間で対立を引き起こす。JozefとJanの努力の全ては、家族の地位上昇のために行われる。彼らは、可能な限り儉約し、あらゆるところから利益を得ようとする。そして、自分たちが稼いだお金と、子どもたちのお金を区別しない。こうして貯めたお金は、いつでも、家族の社会的地位を象徴する土地の購入に使われる。彼らは、子どもたちに、ドレスを買うお金を与えない。だが、家族の裕福さを示す結婚式には、大金を投じる。子どもたちに財産を授けるのは、結婚で良縁を得るためである。教育を受けさせるのは、子どもの出世のためではなく、家族が共同体において高い地位を得るためである。こうしたJozefとJanは、当初、アメリカに渡った息子たちの目的が、一時的に外国でお金を稼いで、故郷で農場を買い、裕福な農民の女性と結婚する、という伝統的なものだと思いこんでいた。しかし、自分たちの関心領域が、息子たちの関心領域と違うことに気づき始めると、手紙で、息子たちに悲劇的な調子で訴えかけるか、もしくは、完全に疎遠になってしまう。(p.456-7)

一方、母親であるJozefの妻AnnaとJanの妻は、JozefやJanのような確固たる志向性を持っていない。彼女たちの考え方は、伝統の範囲に含まれるが、家族的態度が表明されることはない。彼女たちは、個々の子どもたちに対する愛によって、子どもたち一人一人を理解し、子どもたちの個別的な必要性や新しい志向性に共感することができる。(p.457)

子どもは、それぞれ違った態度を持っている。Janの3人の息子MichalとWiktorとMaksは、典型的な農民態度を持つ者から典型的な中流階級態度を持つ者まで様々である。農民態度は、JozefとJanのように、主に農業による財産の獲得を通して、家族の社会的・経済的安定を目指す。家族的連帯の考え方に基づき、家族員は、この目標を達成するために一致団結して働く義務を負っている。そして、家族は、その義務に応えて、家族員を扶養しなければならない。一方、中流階級態度では、自分の生活の安定は、個人の責任であるにとら

えられている。そのため、教育などを通して、個人としての社会的・経済的向上が目指される。(p.457)

四男Michalは、典型的な農民である。彼は、父親が持っている向上志向さえ持っていない。彼は、農民特有の嫌悪感から、軍隊を嫌っている。兵役の時、下層中流階級の成員は、軍曹になろうとするが、彼にそうした野心はない。彼の第一の夢は、帰郷して、父の農場を継ぐことである。彼は、家族的感情をとりわけ強く持っている。そして、その感情は、愛の感情だけでなく、連帯の感情でもある。彼は、ほとんど私的な要求をしない。(p.457)

三男Wiktorもまた、農民である。しかし、彼の父や弟ほど農民的ではない。彼の望む経歴は、農場主になろうとする意味で、農民生活の系列上にある。しかし、すでに、彼は、農民と区別されるいくつかの特徴を持っている。一つは、より強力な私的な要求である。その要求が、父親との対立の源泉となっている。二つ目に、必要最小限の教育に限定されない一般的な教育志向である。三つ目に、「上流の社交界」に取り入ろうとする志向性である。彼は、上流階級とのつき合いを自慢し、社交界の格好やマナーを身につけようとする。しかし、これらの点は、結婚して、農場生活に落ち着くと、消えてしまう。(p.458)

長男Maksは、渡米直後でさえ、農民的な要素をほとんど持っていなかった。7年間のアメリカ生活で、彼は、農業・財産・共同体の関心・家族的連帯といった農民の理想を、次々なくしていった。失わなかったものは、個々の家族員に対する愛着である。彼は、父親の立身出世志向を保持する一方で、典型的な中流階級の経歴において、そうした立身出世志向を発達させている。(p.458)

Jozefの子どもは、Janの子どもたちよりも、いっそう多様性に富んでいる。三男Alfonsと三女Polciaは、農民生活以外にまったく関心をもっていない。しかし、彼らが、まったく立身出世志向を見せていないので、父親は、彼らを軽蔑している。母親も、Alfonsに対しては、父と同じように軽蔑しているが、Polciaに対しては、誇りに思っていないものの、自分を助けてくれるので、若干の愛情を示している。(p.458)

次男Stanislawと次女Peciaの態度には、農民と下層中流階級の態度が混在している。そして、その結果は、下層中流階級的人格へ表面的にだけ同化し、価値ある多くの農民的性格を失うという否定的なものとなる。Stanislawは、特に、自分の人生計画を決めていない。彼は、結婚して農民のままポーランドに残るか、それとも、アメリカに渡るかで躊躇する。最終的に、彼は、アメリカに渡るが、1年後、帰国し、渡米を後悔する。彼は、虚栄心と非常に強力な私的要求を持つ。Alfonsは、職業的な農業教育を受け、Maksは、職業的な工業技術の教育を求め、Waclawは、一種の「スポーツ」として真剣に勉強している。しかし、Stanislawの教育志向は、そのどれにも及ばない。一方、Peciaは、ドレスやマナーといった下層中流階級の外見的差異にだけ同化している。彼女は、立身出世者だが、立身出世に必要な強力な性格を備えていない。彼女は、農民の水準を若干上回る男性と結婚する。しかし、彼女は、夫を中流階級の経歴へせき立てることはせずに、夫と一緒に、農民生活に逆戻りする。彼女は、農場主の妻として必要な資質を備えていない。彼女の怠惰と虚栄心は、農民としての経歴を不可能にする。(p.458-9)

長男Waclawと長女Elzbietaは、心理学的に、最も興味深い。知的・道徳的には、彼らは、農民階級の完全な外側にいる。彼らの関心領域は、両親や周りの人びとと全く異なっている。そして、新しい生活の道筋、とりわけ、教育を、非常に真剣に受けとめている。Waclawについては、労働者の生活向上といった社会的活動に強い関心を寄せている。しかし、彼らは、生活の新しい経済的基盤を発達させない。彼らは、標準的な中流階級の経歴を始めるのに必要なエネルギーと自己意識に欠けている。Waclawは、Maksを真似るべきであり、Elzbietaは、教師かビジネスウーマンになるべきだった。だが、二人は、そうしない。このため、この時期に典型的な内的葛藤を引き起こす。彼らは、家族的結合と経済的関心によって、古い階級にとどまっている。しかし、知的・道徳的には、もはや古い階級と共有するものはない。(p.459)

Janの四男Michalの手紙は、兵役、特にロシア軍における兵役に対する農民

の嫌悪感をよく表している。こうした態度は、多くの農民が兵役を避けるために故郷を捨てるように、農民の間では普遍的である。農民たちが軍隊を嫌う第一の理由は、ロシアでの兵役の間、家族や共同体から完全に離れて、言葉・宗教・文化が異なり、自分たちを嫌っている外国人の間で過ごさなければならないからである。革命を恐れるロシア政府は、ポーランド人兵士を、遠方の地域に分散させて派遣する。さらに、故郷での比較的自由な生活に対して、軍隊では、厳しく継続的な統制のもと、バラック生活を強いる。正確さをそれほど要求されない農作業に代わって、軍事教練では、機械的な正確さを達成しなければならない。そして、軍事教練は、単調だけでなく、農民にとってまったく意義を見いだせない。報酬もなく3年から4年間も無駄にし、愛国心を満たすこともできない。また、農民には、軍隊の荣誉という概念もない。そして、将来の高い地位という物質的利益も期待できない。(p.460-1)

Markiewicz家の手紙シリーズには、1906年8月7日付の手紙から1914年7月5日付の手紙までの約8年間、合計84通の手紙が収録されている。収録の配列は、手紙の書かれた日付順ではなく、手紙の送り手ごとに分類されている。手紙の受け手は、主に、アメリカに住むWaclawとStasである(図2を参照)。一方、手紙の送り手のほうは、多彩である。家族の主な出来事は、略年表(表1)を参照いただきたい。以下では、これらの手紙の一部を抜粋して、送り手の世代と場所により「ポーランドの親世代からの手紙」「ポーランドの子世代からの手紙」「アメリカの子世代からの手紙」「ロシア軍兵役中の子世代からの手紙」に分類し、全訳して解説を加えた。手紙の受け手は、先に述べたとおり、「アメリカの子世代」となる。

表 1

Markiewicz家略年表

- 1906年初め Waclaw, アメリカに渡る(手紙147番, p.466-7)
- 1906年2月13日 Maks, ニューヨークに到着する(手紙201番, p.507)
- 1906年5月 Maks, シカゴにやってくる(手紙201番, p.507)
- 1908年3月 Waclaw, ポーランドに戻るつもりのないことを両親に伝える
(手紙148番, p.467-8)
- 1908年3月 Maks, ポーランドに戻るつもりのないことを両親に伝える。
(手紙204番, p.509-11)
- 1908年4月 Waclaw, 英語などを習おうとしている(手紙204番, p.509-11)
- 1908年～1910年前半 Jozef, Waclawに再三帰国を促す(手紙148番, p.467-8)
(手紙150番, p.469-70)(手紙151番, p.470)
- 1910年3月14日 Jozef, 60歳の誕生日を迎える(手紙150番, p.469-70)
- 1912年1月 Michal, 徴兵される(手紙212番, p.515)
- 1912年10月 Maks, 大学に通い始める(手紙211番, p.514-5)
- 1913年2月4日 Weronikaが亡くなる(手紙193番, p.498-500)
- 1913年3月 Stanislaw, 渡米する(手紙163番, p.481)
- 1914年2月18日 Wiktor, 財産持ちの娘と結婚する。(手紙199番, p.504-6)
(手紙224番, p.524-5)
- 1914年6月 Stanislaw, ポーランドへ帰国する(手紙171番, p.485-6)

図 2 Markiewicz家手紙シリーズ送り手・受け手一覧表

送り手 \ 受け手	Waclaw	Waclaw, Stanislaw	Stas	Maks, Stas	Maks
Anna, Stanislaw	142				
Jozef, Anna	143, 148, 150, 154, 159, 162	166, 169, 170			
Anna	144, 145, 146, 149, 152, 153, 155, 156, 157, 158, 161, 171	163, 164, 165, 167, 168			
Jozef	147, 151				
Jozef, Anna, Stanislaw	160				
Stanislaw	172, 173, 174, 175, 176, 177				
Elzbieta	178, 179, 180, 181, 184	182			
Elzbieta, Anna		183			
Polcia	185, 186				
Alfons		187			
Jan, Ignacy			188		
Wiktor			191, 192, 194, 195, 196, 197, 199, 200	189	190, 198
Wiktor, Jan's wife				193	
Maks	201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 211				
Maks, Stas	210				
Michal			216, 217, 218, 219, 220, 222, 224, 225	212, 213, 214, 215, 221, 223	

(注) 数字は、手紙の通し番号

ポーランドの親世代からアメリカの子世代への手紙

ここでは、主に、1907年から1910年の4年間に、ポーランドにいるJozefとAnnaから渡米したWaclawに送られた手紙を見ていく。Waclawは、アメリカに渡った当初は、家族的連帯を保持しており、親と子の間に態度の相違はなかった。しかし、アメリカ生活に慣れるにしたがって、Waclawは、中流階級態度を帯び、アメリカに永住しようと考え始める。これに対し、JozefとAnnaは、旧来の農民態度から、再三ポーランドへ帰国を促す。そうしていくうちに、親たちは、自分たちと子どもの態度の間にある埋めることのできない大きな溝に気づかざるを得なくなる。次第に、親は、子どもを自分たちの意志に従わせることを諦めるようになる。こうした過程は、一般化はできないけれども、移民を経験した親子関係の興味深い変化を明らかにしてくれる。

144番, AnnaからWaclawへ, 1907年3月10日 (p.464-5)

愛する息子：・・・⁽⁹⁾ 今、私たちは、あなたが自分の家族を思い焦がれていることをとても哀れに思っています、愛する息子よ。しかし、私は、これを意外には思いません。なぜなら、私は、何もかもがこちらにあるにもかかわらず、一度ならずあなたのことを思って涙を流し、あなたが自分の家族の家へ幸せに戻ってくことを神様に祈っているからです。私たちは、あなたに、今以上に頻繁に手紙を書くつもりです。なぜなら、Plockに「行くことは」それほど難しいことではないからです。というのも、あなたも、冬のPlockがどのようなものか、ご存じでしょうから。いつも、雪と寒さです。私たちは、めったにPlockに行きませんが、ここには郵便局がありません。

先日、私たちは、あなたが送ってくれた100ルーブルを受け取りました。その翌日、私たちは、8ルーブルの利子を付けて、そのお金をPeciaとFranusに渡しました。あなたは、私たちに子どもたちのために服の生地を買って欲しいと注文してきたので、すぐに買ってきました。子どもたちは、とても喜んで、あなたに感謝しています。それから、愛する息子よ、健康を害さない程度に、できるだけお金を稼いで、

家に送って下さい。私たちは、そのお金を確実に貯めておきます。私たちが、日常生活の必需品に使ってしまうなどとは考えないで下さい。今あなたが送ってきたものは、あなたのために永久にきちんとしまっておくことでしょう。・・・あなたは、祖母のことをたずねてきました。祖母は、自分のニワトリがすべて持ち去られてしまったとき、雌鳥のように小うるさく言います。Walentowaは、[アメリカにいる]自分の息子たちのことで涙を流しています。Antoniowaは、[夫が出ていったことを]後悔していません。なぜなら、彼女には別の男がいます。私がお会いする誰かが、あなたのことをたずね、愛する息子よ、あなたの最高の幸運を祈ってくれます。そして、誰もが、「神様、どうぞ、私たちが、もう一度幸せに彼と会えますように」と言ってくれます。Peciaのために、すてきなオーバーコートを買いました。春には、子牛を彼女に買ってやるつもりです。・・・Stasioは、しばしば、Dobrzykowに訪れています。・・・何かが、ある愛が、彼をVistulaに近づけているのでしょうか。・・・神様、どうぞ、あなたに数百ルーブル稼がせてやり、家に帰ってくる道を見つけてやって下さいますように。話は変わりますが、養蜂は、再び、よい商売だと考えられています。・・・Elzbietaのkum [god-brother]は、1年間で、80ルーブル稼いだと言っています。・・・だから、もし神様があなたを家に帰してよこしたら、あなたに[いくらか土地を]贈与して、あなたが果樹園と養蜂を始められるようにするつもりです。

[Anna Markiewicz]

Waclawは、手紙の記述から1906年の始めにアメリカに渡ったと推測される。その2年後の1908年、ポーランドに帰国しないことを手紙で両親に伝えている。しかし、渡米して1年ほどのこの時期には、まだ、故郷を恋しく思っていた。故郷に送金していることから、Waclawは、渡米した当初は、家族的態度を保持していたものと考えられる。Waclawの渡米費用は、本来、Peciaの結婚持参金となるはずのお金だった (p.464fn)。結婚持参金の額は、家族の格を表す。したがって、そのお金が、渡米費用に流用されたのは、Waclawがアメリ

カで稼いだお金が、家族の地位向上をもたらすという家族の期待があったからである。そう考えれば、Annaが、「できるだけお金を稼いで、家に送って下さい」というのも、当然である。もちろん、Waclawも、最初は、そのつもりであっただろう。しかし、こうした両者の気持ちは、次第にずれていく。

145番，AnnaからWaclawへ，1907年7月4日（p.465）

愛する息子：・・・アメリカにいるSeweryniakが列車にひかれて死んだというひどい事故の話を私たちは聞きました。それは、本当です。というのも、彼の兄Franciszekが、彼の亡骸を埋葬したからです。愛する息子よ、気をつけなさい。神様、どうぞ、息子をいかなる事故からも遠ざけて下さい。・・・秋に、Alfonsが、真剣にあなたのところへ行くつもりです。ウソだと思わないで下さい。だから、彼の質問に答えて下さい。あなたは、彼の強さを知っていますよね。私たちは、彼の意図は無駄だと言っています。[アメリカに行った子どもを持つ]父親たちや母親たち、とりわけMielczarekの妻は、[アメリカに新しく来た人たちを受け入れ、助けてやっていることで]あなたに感謝しています。

愛する息子よ、あなたが結婚したがっていると書いてよこしたことに、私たちは、驚きませんでした。しかし、もしその女性がよい教育を受けてさえいれば、私たちは、まったく反対しません。このことを、よく考えてごらんください。なぜなら、結婚の事情は、非常に[多くの]条件の影響を受けやすいのですから。しかし、もし彼女があなたの気に入るなら、とてもよいです。神様、どうぞ、息子を祝福して下さい。私たちは、何もかもが最高にうまくいくことを心の底から祈っています。・・・実は、私は、あなたが若かりし時を無駄に過ごさないようにと独り言を言っていました。だから、できるだけよく考えて、結婚して下さい。その女性が従順ですばらしいならば、あなたは、喜びを得るだけでしょう。・・・もし彼女がPlockの出身ならば、彼女に自分の住所をあなたに言うように言って下さい。もし彼女の両親がこちらにいるならば、両親がどこに住んでいるのか、彼らと知り合いになろうと思います。

もし結婚しないならば、お金を家のほうに送って下さい。もし結婚するつもりであれば、送らなくてけっこうです。

身体に気をつけて下さい、愛する息子よ。

[Anna Markiewicz]

家族に対する親子のずれが生じ始めたのは、Waclawが、結婚の手紙に書いたときかもしれない。農民態度にとって、結婚は、家族の大きな関心事である。したがって、家族（特に親）の意向を無視して、結婚相手を選ぶことは出来ない。この手紙145番では、母のAnnaは、息子の結婚に強い関心を抱いているものの、その気持ちを表に出すことを躊躇しているように見える。母親が、息子の結婚相手の教育程度を心配していることは、他の農民の手紙には見られない特異な態度である（p.465fn）。だが、その一方、Annaは、一般的な農民と同様に、結婚相手の両親と知り合いになろうとしている。女性の持つ家族的な集団感情は、男性よりも弱いので、Annaは、単に家族の観点のみからWaclawの結婚を考えてはいないだろう。しかし、Waclawの結婚に対するAnnaの態度には、結婚相手の教育程度を心配するという中流階級的な要素と、結婚相手の家族と知り合いになろうとする農民的要素が混在している。

147番、JozefからWaclawへ、1908年2月24日（p.466-7）

愛する息子：私たちは、お前の手紙を受け取りました。・・・私たちは、お前が心身共に健康であることを望んでいます。なぜなら、このことは、人間の美德であるからです。というのも、2年目がすでに過ぎようとしているが、お前が、宗教や教会のことについて一言もふれないからだ。お前の両親の訓戒を忘れるな。というのも、信仰が第一の事柄であり、それ以外のものはすべて付け足しにすぎないからだ。真実の道から外れるな。このことを考えなさい。というのも、お前が、お前の家族全体に害を及ぼすかもしれないからだ。

さて、ライ麦〔1ブッシェルあたり〕7ルーブルであることをお前にお知らせし

よう。神様のおかげで、この風車小屋にも仕事がある。納屋も、数ブッシェルもた
らしてくれた[場所の賃貸か?]。だから、私たちが、できるかぎり努力したので、
お前たち[子ども]のためによりいっそう[財産]があるだろう。

愛する息子よ、よく考えておくれ。お前が、生計を得るためだけに[貯金もせず
に]大西洋を越えて働いているならば、アメリカを離れて、われわれのもとに戻っ
てきなさい。もしお前が、数百ルーブルもっているならば、私は、私のお金を付け
加えて、お前のためにどこかに農場をかうつもりだ。Dobrzykowにある宿屋が、
今、売りに出されている。もしくは、何か他のもの……

Jozef Markiewicz

Waclawの不信心が家族全体に神の罰をもたらすと考えているように、父親
のJozefは、家族単位で宗教的責任を考えている。これは、一種の家族的連帯
の表れである。それに対して、家族に対する手紙に宗教的な挨拶を書かない
Waclawは、そうしたJozefの態度とは異なっている。また、この手紙147番か
ら、宗教だけでなく、経済の問題についても、Jozefが家族単位で考えている
ことがうかがえる。Peciaの結婚持参金を流用して、Waclawを渡米させたの
は、Waclaw自身のためではなく、あくまで家族の社会的地位を向上させるた
めである。なぜなら、かなり経済的に裕福なMarkiewicz家は、口減らしのた
めに、子どもを移民させる必要はないからである。Waclawが、貯金や送金も
せずに、ただアメリカで生活のためだけに働いているならば、それは、一身に
背負った家族の期待を裏切ったことになる。それは、Jozefからすれば、単な
る時間の無駄である。だから、Jozefは、ポーランドの自分たちの農場で
Waclawを働かせて家族の地位を向上させるために帰国を促すのである(p.466-
7fn)。

148番、JozefとAnnaからWaclawへ、1908年3月29日(p.467-8)

愛する息子：お前の手紙を受け取りました。お前が健康でいることを大変喜んだ。

しかし、もう一つの理由で、お前は、私たちを悲しませている。というのは、お前がポーランドに戻ってくるつもりがないからだ。この時、私の手の中で便箋がぶるぶる震え、書き留めようとして私の手が震えた。どうして、生まれ故郷を去った鳥でさえ、戻って来るというのに！ どのようにしたら、そのような恥知らずな〔卑劣な〕言葉を、あえて公言することができるのか？ お前は、親の訓戒を守るべきだ。私は、お前に聖職者を批判することなど一度も教えていない。お前は、ナポレオンが、教会の長と関係を断って、ヨーロッパ全体に衝撃を与えたことを知っているだろう。そしてその後、ナポレオンがどうなったかも知っているだろう！ お前が、宗教について、すなわち、最もすばらしい宝石について忘れたと言いたいのではない。ただ、1年の間にお前が私たちより出世したからだ。お前が手紙に託したものが悪い。お前が自分の学んだことをそのように使ったことが悲しい。というのも、学んだことは、どんな人にとっても役立つからだ。だが、〔お前の考えは〕そこにいるお前にだけ役立っている。しかし、お前が戻ってくれば、そうではなくなる。〔段落全体が不鮮明なため、翻訳は推測である〕そして、私たちについては、以前と変わらない。……お金に関しては、無理なときには、お前に送れと言う気はまったくない。なぜなら、私は、常に、数百ルーブルを手元に置こうとしているからだ。ただ、お前は、自分の将来のために自分自身のことを忘れるな。……

もう書くべきことはない。ただ、ニュースを知らせておこう。Janの息子であるWiktorは、Petersburgの軍隊に入り、そこで、私たちの家族に会った。私の叔父の息子が3人、そこにいる。その内の一人は、上級の列車車掌であり、もう一人は、内科医、3人目は教授をしている。プロシアでも、私たちの家族は名誉を得ている。Stasiekは、今までのところ、〔結婚に〕成功していない。Elzbietkaもまた、家にいる。私は、次の言葉で手紙を終えよう。ツバメでさえ自分の生まれた巣を忘れないように、どうかお前も故郷を忘れないように。

J. Markiewicz

愛する息子よ、なぜあなたはそんなに怒って、そんなに厳しい答えを私たちにす

るのかい？ この手紙を読んだ後、娘たちは泣いている。その結果、家の中は、とても陰気です。私たち両親は、何を言うべきですか？ あなたは、私たちのもとに帰りたくないと言うが、私は、それを本当だとは思いません。私は、あなたが、自分の両親と故郷を愛していると信じています。・・・

[あなたの母より]

この手紙148番には、家を中心に幸せを考える旧い親世代と、自分自身の幸福を追求する若い世代の対照が見事に表れている。それを顕在化させたのは、ポーランドに帰らないと書いた息子の手紙である。期待していた長男が故郷に戻らないことで、両親が非常に大きな衝撃を受けたことは、手紙の文面から見てとれる。そして、親以外の家族員たちも、その事実を悲しんでいる。Jozefたちが、Waclawの教育に投資したのは、Waclaw自身のためではなく、家族全体の利益のためである。だから、アメリカで、Waclawが、どれだけ出世をしても、Jozefは、少しも喜んでいない。むしろ、自分の幸せのためだけに、教育を使ったことを非難するのである。

151番、JozefからWaclawへ、1910年5月5日 (p.470)

愛する息子：・・・お前は、そうした100ルーブルについて、いつも書き続けている。なるほど、私は、そのお金を送り返そう。しかし、覚えておいて欲しいのは、お前が損害を与えているのは、私ではなく、お前自身だということだ。そして、私については、その通りだ。私は、私が富を増大させるべきだと思っていた。しかし、自分の子どもたちにあっては、何も繁栄していない。娘たちにあっては、よい結婚をしていないし、どの息子も、幸運に巡り会っていない。しかし、もう一度、お前のことに戻ろう。これらの100ルーブルは、お前に送り返す。しかし、なぜ、他の人たちは、十分なお金を故郷に送っているのに、お前は、生活したり、戻ってくるのに十分なお金をもっていないのだ？ 私の夢のすべては、無駄となった。ここに帰って来なさい。[幸運の]星がお前に輝いていないのに、お前は、なぜアメリカに居

座らねばならないのか？ それは、とてもよくないことだ、愛する息子よ。帰国の旅に十分なお金をもっていないならば、Mielczarekから受け取りなさい。私たちが、ここで返すつもりだから。今のところ、土地とその他の財産[を売ること]は自由だ。しかし、お前が買うお金をもっていないならば、その時は、おそらく、神様がお金を与えてくれるだろう。

お前の父より

J. Markiewicz

この手紙151番の前に、WaclawからJozefに対する厳しい批判の手紙があったようだ。中流階級態度になじんでいるWaclawにしてみると、何よりもまず家族の地位向上を考えるJozefの態度は、あまりにも古くさく、我慢のならないものであったのだろう。こうした批判に対し、Jozefは、思わず、子どもたちが親の理想を何一つ実現していないという親の本音を吐露してしまっている。ことによると、こうしたJozefの嘆きは、息子がポーランドに帰らないこと自体よりも、自分と息子の態度の間に大きな溝を発見してしまったことに起因するのかもしれない。

153番、AnnaからWaclawへ、1910年8月8日 (p.471-2)

愛する息子：……あなたが手紙に書いてきたあなたの結婚について、私たちは皆、とても満足しています。ただ、その女性があなたの望むとおりであるならば、神様があなたを祝福して欲しい。私たちは皆、異口同音にあなたのことを望んでいます。「世界で一番すばらしいものは何であれ、どうぞ、神様、息子を認め給え」。しかし、あなたがしようとしていることを、よく考えて下さい。

[農産物。]あなたの父親は、たった今、風車小屋の羽根を取り付けるために、Franekと一緒に出かけました。その作業は、数週間かかるでしょう。Stasioは、小麦粉をひいています。Alfonsは、エンドウ豆を刈り入れています。Elzbietaは、ドレスを縫っています。私たちは皆、仕事をさらに急いでやっています。……

あなたは、Bronciaについて書いていますが、彼女は、結婚しました。彼女は、パン屋と結婚しました。そのパン屋は、Elzbietaとの結婚を望みましたが、Elzbietaが望まなかったと、あなたへの手紙に私が書いたその人です。・・・Wacioよ、あなたの婚約者が何に従事しているのか、誰の家に住んでいるのか、手紙に書いて下さい。というのも、こちらでは、人びとが、あなたの婚約者が彼女の叔父のところへ行ったと言っています。・・・

[Anna Markiewicz]

Waclawと両親は、とうとう、疎遠な関係になってしまった。ポーランドに戻らないうちにも、アメリカで結婚すると言うWaclawに対して、両親は、もはや説得をあきらめている。両親は、Waclawの結婚相手が気に入らないという本音を隠して、表向きは、結婚に賛同を示している。両親にできることは、ただ、「自分のしょうとしていることをよく考えなさい」という助言だけである。息子の結婚に対して、依然として、両親が関心をもっていることは、結婚相手の家族を知ろうとしている点からうかがえる。しかし、JozefとAnnaは、そうした関心にもかかわらず、自分たちの考えにWaclawに従わせることをあきらめている。この手紙は、個人に対する家族的コントロールの喪失をよく表している。

155番、AnnaからWaclawへ、1910年11月1日 (p.473-4)

愛する息子：・・・DobrzykowのWalentyは、[私たちに對抗して]川上に小さな製粉所を建てました。しかし、彼は、1回ひいた小麦粉を1日に4分の3[しか]ひけません。まあ、その製粉所が将来どうなるかはわかりません。Elzbietaについてですが、彼女は、ある男性とつき合っています。その男性は、Lubienの肉屋です。Elzbietaが、彼と結婚するかどうかは、私にはわかりません。しかし、彼女は、この冬に結婚するかどうか必ず決めるつもりだと言っています。もしこの男性でなければ、他の人と結婚するのでしょうか。私は、今、自分[の罪]のために、

十分な困難にあっています。常に新しい客、常に新しい流行、常にこうした新しい事柄のために、私の稼ぎは、十分ではありません。

そして、あなたも知つてのとおり、[あなたの]父親は、いつも次のように言っています。「そこに何もないうときには、われわれは、それなしでやっていける」。しかし、時々、たとえ袖の下からあてがわなければならないとしても、どうしても必要となることもあります！ だから、愛する息子よ、あなたに強くお願いします。もし可能ならば、私の必要のために、少しお金を送っておくれ。Bicia [Elzbieta] は、大きくなりました。Polciaは、もっと大きくなりました。Zoniaは、二人に追いつき始めました。そして、三人は皆、着飾る必要があります。けれども、あなたの父親にそのことを言っても無駄です。もし可能ならば、できるだけ早くお金を送っておくれ。なぜなら、牛や豚や穀物をいくら売れば、それを貯えておけるからです。[あなたの父親が言うには、]そのお金は使えません。私たちは、Peciaに100と200ルーブル与えました。しかし、まだ、200ルーブル与えなければなりません。Biciaもまたそう[お金が必要]です。だから、私たちは、お金を取っておかなければなりません。私たちは、すばらしい豚や牛や馬をもっていますが、すべてこのために誠実に働かねばなりません。あなたの父親は、ただ、自分の歳を言い訳にしています。私は、子どもたちと働こうと思いましたが、その結果、骨にひびが入ってしまいました。あなたの父親はこう言います。「だから、そんなに[たくさんの家畜を]飼うな。働くな。俺がお前に[こうしたことすべてをやれと]命令したか?」。しかし、父親は、何か欲しいときには、そうしたことを要求します。農作物については、すべて悪くはありません。……ただ、私たちは、たくさん働かねばなりません。Biciaは、今も、あのお店にいます。彼女には、教え子がおり、縫い物をしています。Zoniaは、やがて、Biciaを手伝うようになるでしょう。そうしたら、私たちは、さらにいっそう、ものごとを押し進められます。あなたは、手紙に、[妹の結婚式で]新郎の付き添い役をしないつもりだと書いています。私には、そのことがとても読めませんでした。涙が流れてきました。だから、変わりない助力をもたらず神様の御聖母様よ、どうぞ、息子のことを忘れないでおくれ。……

あなたのことを本当に愛している母より

[Anna Markiewicz]

同じ古い世代に属していながらも、父親と母親の立場は異なる。父親は、一つの全体としての家族の福祉と社会的立場にもっぱら関心を持ち、家族員一人一人の実際の個別的必要をほとんど理解しない。これに対して、母親は、成員の個別的必要を大変よく理解し、实际的・個人的なものが欠けている場合はいつでも、家族員に同情する。Annaは、娘たちの個別的必要を満たしてやるために、アメリカにいるWadlawを頼る。こうした母親の態度は、家族員が個人として家族から独立することを促進するであろう (p.474fn)。自分の個別的必要を満たす他の手段がなければ、家族員は、家族の中にとどまざるを得ない。しかし、家族員の個人的必要を理解する母親が、移民による家族の外からもたらされるお金を利用するならば、生活を保障するという家族の意義は、たちまち薄れてしまうだろう。家族という枠を外れても生活できる可能性を家族員に示してしまうからである。

188番, JanとIgnacyからStasへ, 1912年12月2日 (p.494-5)

Stas, お前に手紙を書いたことは、まだなかったと思う。今、クリスマスの厳粛さを前にして、私はまた、お前に手紙を書くつもりだ。というのも、お前と私がお互いに会えるかどうかは、神のみぞ知るからだ。かつて、Gombinに行くときに、Dobrzykowの製粉所についてわれわれが話し合ったことを覚えているか？ 何てことだ！ 私は、いつも、この製粉所のことを心に留めていた。と言うのも、その製粉所は、家族財産のようなものだからだ。Maksは、このことを考えてくれるだろうと私は思っていた。しかし、私は、Maksを頼ることができない。もしお前がこのことを考えているならば、お金を貯めて、こちらに送りなさい。私たちは、それを貯蓄銀行に預けるつもりだ。そして、神様は、その製粉所を買う手助けをしてくれるだろう。そこは、教会に近く、この州全体を探しても同じような場所は見つから

ない。新しい司祭は、居酒屋を廃止してしまった。GorkiのLisは、Kowalskaから共同出資の店にするために、その居酒屋を買い取った。Plebanekの石造りの建物に店を開店した。しかし、現在、彼らは、居酒屋のあったこちらに、その店を移すだろう。・・・

[お前の父より]

J [an] M [arkiewicz]

愛する兄上：私たちが脱殻していることをお知らせいたします。それが終わったら、私は、学校に行きます。しかし、お金がありません。さて、Maciek J.がZiolek [祖母の夫] を殴ったことをお知らせします。それは、悪くはありませんが、Maciek は、30ルーブル支払い、2 週間刑務所に入らなければなりません。・・・

[Ignacy Markiewicz]

手紙188番に表れているJanの態度は、Waclawに対して再三帰国を促していたJozefと対照的である。この手紙188番には、息子のポーランド帰国に対する思い入れが感じられない。こうしたJanの態度は、長男のMaksに対しても同じである（手紙204番、p.509-11）。手紙199番にみられるように(p.504-6)、三男Wiktorの結婚に対して大きな援助をしている点で、Janもまた農民的である。また、手紙161番（p.479）には、Maksがアメリカで成功している様子を、JanがJozefに自慢している記述があり、アメリカに渡った息子たちも家族の一員であるというJanの意識がうかがえる。結局、Janには、家の農場を継がせた Wiktorという息子がいるのに対して、Jozefには、Waclaw以外に頼りになる息子がおらず、Janの家族に比べ成功していないという事情が、両者の違いを生んでいるように思われる。

ポーランドの子世代からアメリカの子世代への手紙

ポーランドの子世代の態度は、多様である。StanislawとElzbietaは、ポー

ランドに自分の居場所を見つけられない。彼らの理想としている中流階級的な生き方は、親世代の農民態度とかみ合わない。そして、渡米してこうした葛藤をすでに脱している兄に羨望のまなざしを送り、自分の理想を実現するためにその兄に頼ろうとする。その一方で、PolciaやAlfons, Wiktorは、農民的生活に自分の生き甲斐を見い出している。Alfonsは、二人の兄の渡米により、新たに両親の期待を受け、それまではなかった向上心を示し始めている。Wiktorは、農民態度からすれば、理想的な結婚をして、新しい生活の準備に忙しい。

176番, StanislawからWaclawへ, 1910年10月23日 (p.488-9)

愛する兄上：・・・私は、何をすべきなのか、わかりません。なぜなら、もし私が以前のように健康ならば、とっくの昔に、兄さんに船の切符をお願いして、すでにアメリカにいるはずだったのに、このリウマチのために、怖がっているためです。ちょうど今で、3週間ベッドに横たわっています。現在、少しよくなりました。私は、医者へ行きました。まだ1回以上行く必要があるでしょう。しかし、父さんは、私にお金をわたそうとしません。父さんは、私にがみがみ小言を言います。父さんが兄さんに小言を言うときよりもかなりひどいです。他の子どもたちには、小言は言わず、私にだけです。父さんは、単純に、私を追い出そうとします。軍隊から戻って、私は、私の服とオーバーコートを買ってから、ずっと、それを着て歩いています。今、冬が近づいてきています。自分のリウマチのために、十分に暖かい冬服を私はもっていません。父さんは、あらかじめ、私のために何も買わないことを告げ、私が依然として病気であるにもかかわらず、山羊の皮のコート代を稼がせるために私を工場に追い出しました。そして、私は、何度も何度も、町まで品物を買に行かねばなりません。兄さんは知っているでしょうが、私は、Wincentowoの小さな店を名義上所有しています。その店は、うまくいっていないのです。なぜなら、彼らは、お金を払わずに、何でも家にもっていくからです。だから、どんなに私たちが稼いでも、すべては家計の中に入ってしまうでしょう。昨

年、私たちは、その商売に60ルーブルをつぎ込みました。現在、そうした大きな出費があるにもかかわらず、120ルーブルあります。しかし、私の取り分はまったくありません。以前、私が帽子を買ったとき、父さんは、私が自分の必要のために店の貯えすべてを使おうとしたとあちこちで話しました。毎週、私は、およそ40ルーブルの品物を売っています。現在、Elzbietaがほとんど店を切り盛りしています。私は、身体が回復したらすぐに、おそらく、すべてを投げ捨てるつもりです。私は、[店から]お金を引き抜いて、その借金を父さんに支払って、アメリカに行くつもりです。なぜなら、父さんとの生活にうんざりしているからです。もし兄さんが船の切符を送ってくれさえすれば、私は、どれだけ兄さんに借金しようとも、喜んで働いて返します。・・・なぜ、そうした悲惨さが家にはありません。およそ600ルーブルが現金であります。私たちは、100ルーブルで馬を買いました。40ルーブルで荷馬車を買ひ、Franusに100ルーブルわたしました。でも、私たちは、彼にもっとわたさなければなりません。なぜなら、彼は、建物なしで、1モルグにつき275ルーブルもするTokaryに6モルグの土地を買ってしまったからです。彼女は、好きなように暮らしています。彼は、Jaworska夫人の船の船長として航海しています。彼は、この夏、1月に40ルーブル稼ぎました。冬にどの程度稼ぐのかは、私たちにはわかりません。Elzbietaには、求婚者がいます。兄さんの知っているStasiekです。・・・Elzbietaを口説いているのは、彼の妻の兄です。彼は、Lubienから来た肉屋です。彼らは、塩漬け肉の店をもっています。彼らは、日曜日にここに来ました。彼は、来週、私たちの豚を買いにやって来るつもりです。私たちは、4匹の豚を飼っており、それは120ルーブルの価値があります。・・・私は、Lubienに行って、彼の評判を調べに行こうと思います。彼には、二人の妹がいます。彼らは、私がどちらか一方を連れていくことを望んでいます。彼には、二人の兄弟がいます。一人は、アメリカにいます。彼らの父と母は、死んでいます。彼らの名前は、Topolskiです。私たちは、すでにお互いを知っています。というのも、彼の妹たちが、私たちの家に来ました。上の妹は、美しい女性です。ただ、何も[お金が]ありません。健康を回復したとき、私は頑張ってみようと思います。しかし、今日は、Jaroslawに住

むPlebanekさんに、助けをお願いする手紙を書くつもりです。もしそこで成功しなければ、間違いなく、Lubienで頑張るつもりです。しかし、もしこちらで何も〔成果が〕なかったら、その時、兄さんに「切符とお金を送って下さい」と手紙に書くつもりです。・・・

Stanislaw Markiewicz

Stanislawは、結婚してくれる女性をポーランドですずっと探してきた。手紙からわかる範囲でも、その期間は、5年間以上にわたる。結婚相手さえ見つければ、ポーランドに留まるつもりだった彼は、とうとう、1913年3月、渡米する（手紙163番，p.481）。しかし、その1年3ヶ月後、帰国する（手紙171番，p.485-6）。彼の結婚がまとまらなかった理由は、経済的要因が大きいという（p.490fn）。Stanislawは、相手に多くの結婚持参金を求めているが、それに見合った富を持っていない。彼が、父親の農場を相続しても、例外的に多額の結婚持参金をもらわない限り、その他の兄弟に相続分を支払うことが出来ない。このため、Stanislawは、大きな農場を持つ女性を結婚相手として探している。当然、女性側の親は、強靱で健康な体を持ち勤勉な男性を望む。だが、彼は、こうした基準を満たしていない。大きな農場を持つ女性と結婚したいと思う理由には、親から経済的に独立したいという願望もあるのだろう。この手紙にもあるように、彼の父親であるJozefは、子どもの病気の治療費さえ支払いを渋る。服も満足に買い与えない。また、家族で経営している店で働いても、家族員の懐には、一銭も入らない。家族的連帯というかつての感情を失っているStanislawには、それは不合理に映る。当然、親は、渡米費用を出すはずもないので、彼は、先にアメリカに渡った兄に頼る。この経済的に頼れる兄がアメリカににいるという構造が前提だが、伝統的態度に固執するJozefの姿が、Stanislawをアメリカに向かわせる動機の一部を形成し、逆説的に、伝統的な家族形態の崩壊を早めているようにも見える。

184番, ElzbietaからWaclawへ, 1914年11月4日 (p.493)

愛する兄上へ：[手紙とお金を受け取った。手紙を送った。農作業] 今、私たちは、十分に粉をひいています。なぜなら、最近、Swieckaの風車小屋が、焼け落ちたからです。私たちは、もっと稼げたでしょう。しかし、あなたも父がどのように粉をひくか知っているでしょう。二つの部分で粉をひきます。現在、皆、なめらかな審美眼をもっています。……私たちは、可能なかぎり働いています。このため、あなたもご存じの通り、私たちは、毎日、新鮮な「コレラ」と「雷」[父からの悪態の言葉]に会います。しかし、他に何ができますか？ 私たちは、耐えなければなりません。なぜなら、自分自身の人生を短くすることや、反対の道[原文ママ?]に行くことは不可能ですから。あなたは、全部でどれくらいお金があるのか、聞いています。[銀行の金額を数え上げる、など] Maksym Przanowskiは、いまだに、お金を返してくれません。彼は、そのお金は、教会[建設]のためのものだと言っています。おそらく、私たちは、[裁判所に]不服を申し立てなければならぬでしょう。Wincenty Przanowskiは、首をつりました。[Przanowski家の人びとは]とんでもない人種(species)です。Wladyslawa Markiewiczは、結婚しました。Polciaは、その「ならず者」(cham)[=Ham, 聖書の人物=悪漢]と結婚する予定でした。しかし、それはうまくいきませんでした。私については、あなたに書くべきことはありません。私の人生の道全体が、トゲのある低木の種がまかれています。……必要ならば私が額に汗して自分で生計を立てさえしてもよいと思えるような結婚できそうな男性[おそらく、男性のタイプ]は、急いで私と結婚しようとしません。それに対して、見る価値もないような種類の男性が、私に自分を押しつけてくるのです。そして、私の性格は、悲痛に耐えることや結婚の代わりに、ずっと乙女のままでいることを好むような性格です。私の人生全体を通して、私は、不運の餌食であるでしょう。だから、私の人生は、使い尽くされつつあります。

Elzbieta Markiewicz

この手紙184番には、ポーランドの生活に対するあきらめと恨みが綴られて

いる。Elzbietaは、多くの男性とつき合うものの、結局、結婚までには至らなかった。このようなElzbietaの事例は、より下の階級では頻繁に起きるという(p.475-6fn)。男性の場合は、より高い教育を受け、よりよい職をもっているならば、すでに自分の階級から上昇したことになる。したがって、彼にとって、結婚は、上昇という点では、二義的である。しかし、女性は、結婚するまで、社会的上昇は不可能である。教育や洗練度は、ただ、結婚を通した上昇の可能性を高めるだけである。しかし、生活状態が厳しく、上昇志向が強く発達した社会的環境では、そのような女性が、自分の階級より上の男性と結婚する機会を見つけるのは難しい。なぜなら、男性もまた、自分の階級より上の女性との結婚を望むからである。しかし、洗練された女性は、自分と同じ階級の男性との結婚に甘んじることができない。通常の結果は、まだ見ぬ素晴らしい結婚相手を待った末に、結局、未婚で老いることを恐れて、野心以下の結婚をする。彼女の上昇への野心は、その後、彼女の子どもに託される。こうしたElzbietaは、不満をいだきながらも、父と一緒に働かざるを得ない。自分の運命を切り開く努力は成功していない。Elzbietaの態度は、中流階級が理想とする生活像を受け入れつつある。しかし、その理想を実現する手段が、彼女に開かれていない。こうした一種のアノミー的状况が、この手紙には表れている。

186番、PolciaからWaclawへ、日付不明(p.494)

愛するWacio様：葉書を下さったことを心から感謝しています。というのも、私のことを忘れてしまっていたのですから。あなたは、私に婚約者がいるのかどうかたずねていますが、います。実際には、現在婚約者がいて、そして、過去に別の婚約者がいました。私が望んだ人は、両親が許してくれませんでした。私が望まなかった人は、両親が結婚するよう命令しました。しかし、私は、村出身の農場主以外のいかなる人とも結婚するつもりはありません。そして、現在、実は、Wincentowo出身の二人とつき合っています。両親が、その内の一人と結婚を許すかどうかは、私にはわかりません。しかし、もし両親が、今、私が結婚するつもり

のひととの結婚を許さなかったならば、私は、まったく結婚するつもりはないです。
しかし、1年以内にアメリカに行くつもりです。……

Apolonia Markiewicz

187番, Alfonsから Waclaw と Stanislaw へ, 1914年 4月14日 (p.494)

愛する兄上たち：私が兄さんたちに文章を書くのは、初めてです。……Stasiek, あなたは, Elzbieta について書いています。だから、私は、あなたにお願いいたします。そのことを忘れないで下さい。……私は、農業組合に加わりました。現在、組合の人びとは、Zachowo 村にあるいくつかの農場を訪ねるために、Kalisz 州への旅行を手配しているところです。この村は、ポーランド王国 (kingdom of Poland) 全土で初めてのものです。なぜなら、そこの農民たちは、畑や家でよい秩序を維持しているだけでなく、この村には、電話さえあり、家や馬屋には電灯がついています。だから、私は、行って、この村を見ることを望んでいます。10年前、この村は、第一級の泥棒たちの村でした。この旅には、10ルーブルかかるでしょう。出発は、5月の末です。……

[Alfons Markiewicz]

Polcia と Alfons は、農民態度が濃厚である。Waclaw や Stanislaw に比べ、Alfons は、向上心がないという理由で、両親から期待されていなかった (p.484fn)。しかし、兄二人の渡米で、家には Alfons しか男手が残らず、家の農場を彼が相続する可能性が出てきた。それにともなって、彼に、農業組合に入るという新しい向上心が芽生えたようである。

196番, Wiktor から Stas へ, 1913年 5月24日 (p.501-2)

愛する兄 Stas 様：……あなたの最後の手紙で、あなたが稼いで貯めていた700ルーブルを私の住所に送りたいと書いてありました。あなたがそんな大金を節約していて、私は大変喜んでいます。そして、アメリカの銀行が、こちらの地方自治体

の貯蓄銀行ほどに安全でないようでしたら、そのお金を家に送ってしまうほうが本当によいでしょう。そして、私は、そのお金を地方自治体の銀行に預けるつもりです。ここポーランドで、アメリカのお金がロシアのお金と等しくなるという噂を聞くということを、付け加えなければなりません[1ドルが、1ルーブルになる。]。もしこうしたことが1回以上起きるならば、人びとは、自分の貯めたお金の半分を失うことになるでしょう。こうしたことすべてを考慮に入れて、愛するStas兄さんよ、心から誠実にアドバイスを下さい。家にあなたのお金を送って下さい。私は、送ってもらったお金を無くしたり、放置したりしないで、つまり、銀行に預けることを、良心に誓って請け負います。私がそのお金を必要とする場合には、書面にした借用書をあなたに送るつもりです。というのも、CzyzewのKowalczyksとうまくいくには、このお金は、私にとって非常に役に立つだろうからです。そこで、少なくとも2000ルーブル示す必要があるでしょう。だから、もしあなたがお金を送ってくれるならば、私はもっと大胆になれるでしょう。なぜなら、それが借りたお金だとは、誰も知らないでしょうから。私は、少なくとも2000ルーブルと言います。さらにたくさん示すことができれば、よいでしょう。というのも、彼ら自身がお金を必要としていないにもかかわらず、5000ルーブルを現金でもっているの[競争者]がいるからです。愛するStas兄さん、私の努力が幸福をもたらすであろうか、それとも、取り返しのつかない損失となるか、私にはわかりません。私の偉大なる神様よ！私は、助けて下さることを哀願いたします。[果樹園、農作物、農作業に関するニュース；友人たちの結婚]

[Wiktor]

Wiktorは、自分の結婚話が順調に運ぶように、アメリカいる兄Stasに送金を依頼する。結婚は、伝統的な農民態度から言えば、家族の社会的立場にとって重要なので、兄弟に送金を頼むことは、当然である。その一方で、借用書を書くという一種の他人行儀から、Wiktorの中で、家族的連帯が変質しつつあることもうかがえる。Stasは、アメリカに渡った4人のなかで、最もポーラン

ドに送金している。Maksが、アメリカで稼いだお金を、大学に通うために使ったのとは対照的である。そうした意味で、Stasは、アメリカの子世代のなかで最も家族的連帯を保持していると言えよう。

199番、WiktorからStasへ、1914年4月13日（p.504-6）

愛する兄上Stas様：私がGrabieにいたとき、兄さんが、私からの知らせがないと文句を言っていた手紙を、父さんが、ちょうど受け取りました。私の最後の手紙の中で、行われる予定だった私の結婚式について書きました。私の結婚式は、2月18日の正午12時に行われました。数日後・・・私は、愛するMaks兄さんに手紙を送りました。・・・そして、Stas兄さんがMaks兄さんと会うだろうと期待していました。・・・それでもやはり、私は弁解できたとは考えていません。しかし、お願いです、愛する兄上。どれほど多くの様々な必要不可欠な事柄を、決着させなければならぬか、私の状況を理解して下さい。そして、祭壇の階段までやって来て、結婚するまで、そうした事柄は、すべての時間を使い、やっかいごとを引き起こします。人が結婚式を執り行うとき、こうしたあらゆるやっかいごとと、方向転換と、予期しない出来事が、いたるところにあるということを信じられますか？

何てことだ、愛する兄上。それは、すべてのほんの始まりにすぎなかったのです。現在、一連のこうした事柄とやっかいごとが、私の目の前にあります。結婚式の前の重要な事柄について触れたくありません。なぜなら、兄さんは、それらを想像しているに違いないと思うからです。私の実際のやっかいごとの一部のみを記述します。3月28日、家族委員会（family-council）がやって来て、農場全体をひっくり返して調べました。私は、Gombinの地方自治体裁判所で、それを受け取りました。私が受け取ったのは、冬穀物のまかれたわずか30モルグの土地と井戸、そして、15コーシーのジャガイモ、わらでいっぱい納屋の一部です。いったい、どうやって、何も手に持たずに、農作業を始められるのでしょうか？牛もなければ馬もありません。荷車も縄も、何にもないです。建物の屋根は、愛するStas兄さん、いわば、嘆かわしい状態です。雨が来たら、雨は、中庭に降り、納屋に降り、馬小屋に

降り、地下室に降るでしょう。あらゆるところで、雨漏りします。家の近くの柵は、壊れています。というのも、この家の近く以外には何もないからです。どこを見ても、何を見ても、修理しなければならない。要約すれば、通常ならば、居住者が、去るような場所だということです。家庭と土を耕すことにとっても、いずれにせよ、ここでは、ごく些細なもので、買わなければなりません。彼の誠実な願望にもかかわらず、父さんは、一から十まであらゆるものを私に買い与えることができるでしょうか？ 既に、あらゆる点で、父さんは、[彼の願望の]証明を一度ならず私にしています。そして、私は、父さんに感謝していますし、自分が死ぬまで感謝し続けるでしょう。私のわずかばかりの貯金は、結婚式で使い果たしました。ただ、今となつては、何も準備のない時に、農作業を始めることとは何かについて理解しています。・・・だから、お願いします。手紙を書かなかったことで、私を怒らないで下さい。

結婚式については、最初に触れたように、この日、天気は最高でした。・・・結婚式も、とても素晴らしかったです。教会は、緑や光で美しく飾られていました。日曜日と同じほど、多くの人たちが見に来てくれました。Radziwieから来た司祭は、結婚式に25ルーブルを事前に支払うよう請求しました。しかし、その司祭は、結婚式をすばらしく執り行いました。私は、とても満足しています。私たちは、大きな披露宴はしませんでした。父さんは、そのお祭り全体の支払いをしました。なぜなら、そのように承認されているからです。[お客を列挙する。「ごく親しい友人と親類」で、50人]お客たちは、十分に楽しみ、十分にご馳走を食べました。だから、だいたい、満足していただけたでしょう。新婦のヘアネットのためにお金を集めることはしませんでした。・・・

さて、私の農場にすでに何があるか、あなたに記述します。碎土機、すき、荷車、あらゆるものが新品です。そして、父さんがくれた牛が1頭。Antosia[妻]の祖母は、妻に、子牛を連れた大きな若い牛と、10羽の雌鳥をくれました。やや年老いた私の祖母は、休日用の小さなチーズと半パイントのバターを除けば、今までのところ、私に何もくれません。でも、神様よ、どうぞ、こうしたことに對してさえ、

祖母に報い給え。しかし、父さんと母さんは、できうる限り何においても、できうる限りで最高の援助を私にしてくれます。おそらく、神様も、将来においても、私を助けて下さるでしょう。私は、そのことを常に忘れないでしょう。同時に、私は、父さんと母さんの健康と長寿を神様にお祈りします。神様の助けによって、私たちは、ここで大変よく暮らすことが出来るということを、さらに私は触れたいです。スモモやサ克蘭ボの挿し木をたくさんします。だから、果樹園は、もっと大きくなるでしょう。果樹園は、農場主の安寧の一つの源です。……父さんと母さんは、義理の娘とこのすべての結婚一般について大変満足しています。……

できるだけ急ぎ足で、この手紙の最後まで来ました。なぜなら、私はペンを脇に置いたら、すぐに、Grabieの愛する両親のところへ行って、もう一度あの古い街角を見るために、蒸気自動車（steamer）をつかまえる準備をしなければなりません。……

Wiktor M.

Wiktorは、ポーランドで、大きな農場を相続した女性と結婚した。その女性の結婚持参金は、6000ルーブルの価値がある30モルグの土地だったように、非常に大きなものであった。この手紙には、結婚の際にしなければならない事柄が示されている。農民として生きていくことの決意したWiktorに対して、父のJanは、様々な援助をしている。それは、同時に、結婚した2人に援助をすることが、家族の地位を示す場でもあるからだ。Wiktorが農場主として成功することは、家族の将来に大きな影響を与える家族の関心事である。したがって、Wiktorを援助することは、家族全体にとって生産的である。

アメリカの子世代からアメリカの子世代への手紙

ここでは、Janの長男Maksが、Jozefの長男Waclawに送った手紙を見ていく。二人は、いどこにあたる。二人とも、ポーランドの家族的束縛から抜け出てきたが、アメリカに到着して、家族的な人のつながりを求めている。しか

し、それは、ポーランドのものとは、全く異質である。ポーランドの家族は、一種の運命共同体であり、家族の存続によって個人の生存が保障されていた。しかし、アメリカで彼らが求めた家族的つながりは、個人の必要性を満たすために結ばれる人間関係である。あくまで、個人が主であり、必要性がなくなれば、互いに離れる運命にある。そこには、家族的連帯は存在しない。アメリカでの家族的つながりは、経済的自活に関する情報ネットワークであり、一時的な援助を頼む保険である。

201番, MaksからWaclawへ, 1906年8月7日 (p.507)

愛する兄上Waclaw様〔実際はいとこ〕：財産の取り決めによって、われわれ二人は、はからずも、アメリカで巡礼者となりました。だから、わたしは、あなたに兄のような愛着を感じています。そして、そうであることを、あなたに宛てたこの手紙で証明させて下さい。あなたの住所は、故郷に聞きました。わたしに、あえて言わせて下さい。おそらく、あなたは、私と、ここアメリカで定期的到手紙のやりとりをしたいとはあまり思っていないでしょう。しかし、それは、単なる憶測にすぎません。それがどの程度のものかは、実際には、未来が明らかにしてくれるでしょう。

だから、私が、2月13日に、アメリカのニューヨークに來たことをお知らせします。それから、ニューケンジントンにいる友だちのところへ行きました。……そこで、5月16日まで働きました。ガラス工場での1日8時間勤務でした。1週間に、12ドル50セントから14ドル稼ぎました。稼ぎの差は、どのくらいガラスができたかによって決まります。

その工場が閉鎖されたので、そこを離れました。……シカゴに來ました。シカゴでは、知り合いや、母の叔父の息子であるLeonard Krolに会いました。彼とは、現在まで一緒に暮らしています。南シカゴに來て以来、ポーランド人の大工と一緒に1日8時間働いています。時給35セントもらっています。当然、夏の間は、この仕事で大変忙しいですが、冬には、間違いなく、この仕事もなくなってしまう

でしょう。そこで、工場に入りたいのです……もしくは、同じような仕事を期待して自動車工場に入りたい。今月2日、故郷から手紙を受け取りました。幸先よいことに、同時に、あなたの住所も手紙にありました。だから、あなたのことをいろいろ知りたいです。何をしているのか、どこに誰と一緒に住んでいるのか。そして、一般に、あなたの成功についてお知らせ下さい。あなたに何を聞かれても、喜んでお答えしたいと思います。……あなたのご多幸、ご健康、ご成功を心から祈っております。あなたを抱擁し、キスします。

あなたの弟より

Maksymilian [Maks Markiewicz]

この手紙201番には、故郷のポーランドを離れた同じ境遇同士の親近感が表れている。一般に、ポーランドを出ようと思う者は、家族的連帯を煩わしく思っている。しかし、実際に、アメリカにやってくると、そうした家族的な感情が、一時的に復活する。そして、家族という一次的なネットワークを活かして、見知らぬ土地で生きていくために必要な情報を収集する。仕事に関する情報では、特に、賃金に大きな関心を示している。賃金に対する関心の高さは、アメリカに来た当初は、できるだけ短期間のうちに必要な金額を稼いでポーランドに帰るという出稼ぎ意識が高いためである。

202番、MaksからWaclawへ、1907年3月27日（p.508）

愛する兄上：あなたの手紙に、私はとても満足いたしました。なぜなら、あなたが、とても良い仕事に就いているからです。去年の夏に、あなたが私に書いてくれた手紙を覚えています。あなたが、1日1ドル50セントでガラス工場で働いている様子を書いてよこしたとき、あなたに同情しました。あなたへの心からのアドバイスは、大工の仕事を、特に自動車工場での仕事を決して手放すな、というものだったろうと思います。さらに、自動車の仕事の仕方を知っているのなら、アメリカのどこでも仕事を見つけられる、ということでした。将来、私は、乗用車を造る自動

車工場に入るつもりです。というのも、私のところから遠く離れていないところに、何千人もの自動車工が働く大きな自動車工場があるからです。私が聞いたところでは、アメリカ全土に向けて「Pullman」と呼ばれる自動車を作っているメインの工場だそうです。その工場から、あらゆる点でもっとも素晴らしい自動車が生産されています。気を付けて見て下さい。必ず、「Pullman」の銘の入った自動車を見つけるはずだと思います。

Stasioが来たとき、もしあなたが住んでいるところで彼に向いたものがなかったならば、彼を私のところに寄こして下さい。できるかぎり、私は、彼を助けようと思います。しかし、ご存じのように、ポーランドから新しくやってきた人には、なかなかいい仕事が見つかりません。アメリカの習慣に慣れていないですし、言葉もわかりません。ですから、気をつけていただきたいのですが、最初に、Stasioに気まぐれを起こさせないようにしてください。私は、彼にもまた、大工の仕事に挑戦して欲しいです。……

Maksymilian

渡米後1年以上経ったこの手紙202番から、MaksとWaclawが、被雇用労働を通して社会的に上昇しようとし始めていることがわかる。これは、彼らが、農民態度から中流階級態度へ移行していることを示している。特に、Maksは、経済生活について抜け目が無く、Waclawより中流階級的である。ポーランドの自作農にとって、被雇用労働、すなわち、他人のための仕事は、単なる生存のための補足的な手段にすぎない。自作農の重要な関心事は、財産の獲得による生活の安定と社会的地位の向上である。かつてポーランドでは、被雇用労働を通して社会的に上昇するという展望がなかった。この点で、アメリカへの移民は、非常に多くの可能性と働く待遇の大きな違いによって、農民の心理に深い革命を引き起こした。すなわち、都市の職工（city-workman）の関心が、農民の関心に加えられたのである。ただし、都市職工の関心が、農民の関心にとって代わったわけではない。農民出身の職工は、二つの点で、先祖代々都市

で職工をしている人たちと異なる。第一に、農民出身の職工は、仕事の内容には関心がなく、賃金のみを考慮する。第二に、農民出身の職工は、自分の労働を、自分の生活を永続的に組織化する手段としてではなく、暫定的な状態、すなわち、彼にとって唯一安定した生活の組織化をもたらす財産を獲得する手段としてみなしている。それに対して、職工の心理をもち、同じような上昇志向をもつ人は、被雇用労働を、それ自身最終的な目的とするか、もしくは、さらにより被雇用労働を得るための手段とする。こうした違いはまた、ポーランド移民たちのあからさまな出し惜しみや低い生活水準というアメリカの職工が非難する事柄を生み出す。職工の心理をもつ人は、被雇用労働を多かれ少なかれ永続的な状態と考え、できるかぎり快適で楽しい生活を送ろうと試みる。それが、彼にとって正常な状態だからである。農民の心理をもつ人は、被雇用労働を一時的な機会と考え、必要なものを最小限に抑え、仕事が終わるまで生活のあらゆる楽しみを延期する。それが、彼にとって、暫定的であり、異常な状態だからだ。Maksの手紙は、こうした態度の変化の好例を与えてくれる。当初、Maksは、故郷に戻り、おそらく故郷で土地などの財産を獲得するために、節約し、お金を貯めていた。その後、彼は、躊躇しだし、故郷に戻らないことを半ば決心した。彼は、職工であり続ける決心をまだしていないが、60ドルもする腕時計を買うという農民なら決してせず職工のみがする出費を既に行っている(手紙207番, p.512)。しかしながら、彼は、依然として財産のことを考え、家を買うことを手紙に書いている。そして、とうとう、彼は、稼いだお金を費やして大学に行くという農民の心理に完全に矛盾する行動をする。このことは、もはや財産ではなく、被雇用労働が、彼の生業となったことを証明する。また、経済の事柄における彼の農民の態度が、典型的な職工の態度に変化したことを証明する (p.508-9fn)。

204番, MaksからWaclawへ, 1908年4月30日 (p.509-11)

愛する兄上Waclaw様：・・・南シカゴからインディアナ港へ引っ越したこ

とをお知らせします。仕事場に近くなったので、工場まで歩いていけるようになり、1日15セントかかっていた電車賃を払わなくてすむようになりました。

あなたが英語や上級の科目までも習おうとしていることを、とても喜んでいます。というのも、教育があれば、この国では生存が確かなものになるでしょうから。あなたは、[軍役の前に]数年早くアメリカに來なかつたことを後悔していることでしよう。そして、[軍隊で]ロシア語を習う代わりに、英語を習わなかつたことを後悔しているでしょう。今では、自分の生存が確実になったと、はっきり言うことができるでしょう。

私はまた、故郷から、父から、母から、そして弟のWiktorから手紙を受け取りました。WiktorがまだPetersburgにいた頃、私は、アメリカで結婚するつもりなので、故郷に戻らないだろうという手紙を書きました。私は、Wiktorに、私の決心を[手紙に書いたように]完全に両親に送って欲しいと頼みました。しかし、Wiktorは、手紙で送る代わりに、彼が故郷に戻ったときに両親に話しました。これは、Wiktorが私に書いてきたことです。彼は、気づいていたのでしょう。私の母は、私のことを待ちこがれていたのです、このことでとても取り乱し、泣き出しました。それに対して、父は、ほとんど気にしませんでした。Wiktorも、父がほとんど気にしていないことに気づいていました。それから、母は、送ってきた最初の手紙で、そうした考えを頭の中から捨てて、故郷に戻ってくるように私に懇願しました。それに対して、父は、私の帰郷には一言も触れず、ただ、Wiktorが軍隊から元氣に戻ってきたことを喜びながら知らせてきました。そして、Wiktorがくじ引きをすることになっていたとき、私の聞いたところでは、父は、[Wiktorを兵役免除にするために]奮闘したそうです。兵役免除にしてもらうために、役人に200ルーブルを支払いさえしたそうです。その結果、もし、Gostyninの委員会が、Wiktorを兵役免除にするならば、父は200ルーブル支払うことになっており、そうでなければ、その時、その役人は、お金を返してくれることになっていたそうです。結局、その委員会は、Wiktorの兵役を免除しなかつたので、父は返金してもらいました。したがって、今、父は、私に、[健康状態が悪かつたので、Wiktorは軍隊から送り返されてきた]

Wiktorも帰ってくれば、お金も返ってきた、と手紙に書いてきたのです。父は、喜んでいたにもかかわらず、Wiktorが書いてきたように、Wiktorにイースター祭用の服さえ買ってやらなかったそうです。愛する兄上、一言で言えば、父の中に私に対する愛情をまったく見いだせません。もう、過去のことです。それと同時に、母から、母が自分の手で書いた手紙を受け取りました。母は、私のことを嘆いて、私に涙ながら故郷に戻ってくるように頼んできました。私の心は、最愛の母の言葉によって悲嘆にくれました。将来、母の望みをかなえるつもりです。

愛する兄上、私が、宗教と社会主義をどのようにみなしているかについての問題ですが、宗教にも社会主義にも、わざわざ深く関わるようなことはしていません。宗教に関わらないのは、私はよくわかっていますが、私はカトリック教徒であり、できるかぎりカトリックの義務を果たしているからです。私は、敬虔ではありません。というのも、毎週日曜日は働かねばならないので、お祈りをする暇がないのです。あなただけにうち明けますが、7日から2日までのイースター祭の間でさえ、私は働いていました。……しかしながら、私は、死ぬまでカトリック教徒でいたいと思っています。

政治については、私は、諸問題や政党についてほとんど関心がありません。時間がないときには、1セントで新聞を買って読んで、それで済みです。……

M. Markiewicz

この手紙204番には、アメリカという新しい環境では、教育を通して自分の実力を高めることが何よりも重要であるという認識が表れている。これは、「自分の生存は、自分の責任である」という個人主義的な発想と言える。彼がこうした考え方を持つに至る過程には、父親Janの冷淡さも一定の影響を与えただろう。Maksは、自分が故郷に戻ったとき、農場を相続する可能性やそれ以外のもので生活を確立する可能性について、父親に打診していたはずである。しかし、父親の関心は、この手紙からわかるように、ポーランドに残って親の面倒を見る予定の弟Wiktorに向けられている。アメリカに渡った子どもに対

するJanの無関心は、JanからStasへの手紙にも表れている（手紙188番，p.494-5）。一方のMaksも、アメリカ滞在中に父親への信頼が失われたと別の手紙に書いている（手紙205番，p.511）。こうした点から、移民たちを中流階級態度へ変える要因は、アメリカの環境だけでなく、ポーランドの家族から受ける待遇にもあると言えよう。このように、まったく中流階級的なMaksに対して、Waclawは、社会主義を信じているにもかかわらず、より農民のままである。Waclawは、直接的利用とは別に、教育それ自体を評価している点で、農民より上の水準にある。しかし、彼は、教育から新しい生活の基盤を作り出せず、経済的には、下層階級に属することに満足している。ただ、社会的には、姉のElzbietaのように、上昇したいと思っている。それに対して、Maksは、階級を分ける社会的差異としては、教育や理論的問題に関心をもたないが、教育を新しい生活の経済的基盤にしている。こうした生活基盤によって、Maksは、社会的にも、経済的にも、農民階級の外に完全に出ることが可能となる。Waclawは、Maksと同じことをしたいという欲求を表してはいる。しかし、Waclawには、達成できなかった（p.511fn）。

211番，MaksからWaclawへ，1912年8月21日（p.514-5）

愛するWaclaw様：・・・おそらく、今月の31日には、シカゴにいます。ペンシルバニア州のCambridge Springsに行く前に、いくつか買い物をしなければなりません。それらのうち、ウェブスター辞典も買わなければなりません。1912年版で18ドルします。古い版では、12ドルで買えます。この辞典は、学校で不可欠なものです。Valparaisoの学校を去ることは、予定していなかった出来事ではありません。というのも、以前から、そうするつもりでした。英語に関しては、5年以内で習得する十分な時間があります。ポーランド民族同盟（Polish National Alliance）の学校では、年間150ドルですみますが、ここValparaisoでは、300ドルかかります。だから、この費用の問題だけでも、Valparaisoを去る価値があります。・・・私がシカゴに着く前に、お手数ですが、古本屋について誰かから聞いておいて下さ

い。そうすれば、われわれ二人は、行って、この本を買うことができます。……

Maks

中流階級態度を持つようになったMaksは、とうとう、アメリカで稼いだお金を使って大学に行こうとする。そのために、ポーランドのWiktorに、卒業証明書を送ってもらっている（手紙190番，p.496-7）。また、手紙222番（p.522-3）にあるように、他の兄弟たちも大学に行くことに賛成している。

ロシア軍兵役中の子世代からアメリカの子世代への手紙

ここでは、兵役でロシア軍にいるJanの四男MichalからアメリカのStasらに送られた手紙を見ていく。18世紀後半に、ポーランドは、プロイセン、ロシア、オーストリアによって3回にわたって分割され、独立国としての地位を失う。ナポレオンの遠征後、1815年のウィーン会議によって4回目の分割が行われた。国家を持たないポーランド人は、占領軍の兵役に行かなければならなかった。このようなポーランドの特殊事情は、ナショナリズムなどの問題を考える際に興味深い。

213番，MichalからMaksとStasへ，1912年5月26日（p.515-7）

……愛する兄上たち：……私は、今、兄さんたちからの手紙を待っているところです。なぜなら、私は、兄さんたちに送ってもらった6ルーブルを受け取ったからです。そのことで、私は、兄さんたちに心から感謝しております。その6ルーブルは、様々な出費に対してとても有用でしょう。というのも、現在までのところ、私は、タバコを買うお金さえ持っていません。なぜなら、私は、家から何一つ受け取ってこなかったからです。そして、こちらSolenskでは、何もかもが高価です。ブーツの靴底の平均は、3ズロティします。……私たちの故郷では、3コベックで買うことのできる小麦パンの一塊りは、こちらでは、5コベックします。

私は、今証明されているような悪い運命が私に降りかかるだろうとは、一度も予測しませんでした。というのも、もし私が兵役に行かねばならないと知っていたならば、ここ、この泥だらけで汚れたSmolenskに決して来るべきではなかったでしょう。愛するStanislaw兄さん、あなたの代わりに、もし私がアメリカに行っていたならば、私は、もっとすばらしくやれたことでしょう。彼らが、私たちに災いをもたらす。そんなことがあったまるものか！ [忠誠の] 誓いの後には、彼らが、私たちにそれほど災いをもたらさなくなるだろうと、私たちは願っていた。しかし、いっそう悪くなっています。正午まで、彼らは、兵舎の近くで私たちを走らせ[訓練させ]ます。午後には、彼らは、私たちを仕事に送ります。・・・彼らは、今年、Somolenskに皇帝がやってくることを期待しています。彼らは、そのために、私たちにさらに災いをもたらします。私は、首尾よくやっていると家に手紙を書きました。しかし、もし母さんが、こちらでの私の状態を知るならば、たくさんの涙を流すことでしょう。私は、おそらく、兄さんと私自身に対して償いをするつもりです。私は、死人のように歩いています。というのも、兵役をつとめることは、あまりにも苦痛だからです。兄さんは、自分自身を解放しました。しかし、私は、ほとんど成功しないでしょう。私は、しばしば、医務室に行きます。しかし、その結果はどうだったのでしょうか？ 私たちのところにいるのは、単なる老いぼれた泥棒の内科医が一人だけです。私が彼のもとに行くときはいつでも、彼は私の耳を密封して、何か書きます。・・・彼は、私が自分で自分の耳を傷つけたと言います。彼は、報告を書いて、私を軍事裁判所に送ると言います。しかし、この裁判所には、中身がありません。彼は、ただ、私を脅そうと試みるのです。もしくは、悪魔は、彼が何を考えているのか知っています。・・・彼は、現在までのところ、私を病院に送らなかつたことを除けば、私に悪いことを何もしませんでした。私は、そのことを我らが主なる神様と神様の御聖母様にお願ひします。なぜなら、病院の中では、彼らは、食べるものをほとんど与えませんが、しかし、十分に寝たり休んだりすることができたからです。私は、しばしば、病院で一緒に寝ていたすべての男たちを見かけます。・・・ただ一人、Lublin出身の人だけが、完全に自由にされて

います。……私の知っているもう一人の人は、髪の毛が抜け落ち、頭が膝のようにはげてしまったのですが、完全には解放されませんでした。しかし、回復するために、6ヶ月間家に送られただけでした。[天気、訓練、仕事の記述。] ああ、神様の御聖母様よ、私をこのモスクワ野郎の小言の中から運び出し給え！……

Michal Markiewicz

どうぞ、軍隊での私の「贅沢な」暮らしについては家に手紙を書かないで下さい。母が、悲しむでしょうから。

この手紙213番には、Michalのロシア軍に対する嫌悪感やロシア軍での窮乏生活の様子がよく表れている。故郷の家族には、その苦しい生活を秘密にし、代わって、アメリカにいる兄に援助を求める。MichalがStasらに送った手紙の半分には、送金に対するお礼の言葉か、送金を依頼する言葉が、含まれている。MaksやStasも、こまめに弟へ送金している。

224番、MichalからStasへ、1914年4月20日（p.524-5）

愛する兄上：……写真では、あなたはとてもすばらしく若く見えます。写真の中の人があなたであることをわかるのは、いくぶんむずかしいです。というのも、あなたは、かなり太っていましたから。あなたは、まったくあなたじゃないみたいです。……W. Borekもまた、元気そうに見えます。明らかに、あなた方は、互いに仲良くしていますね。自分たちの近所出身でよく知られている仲間をもつことは、とても正しくてよいことです。一緒に暮らしているのですか、それとも、一緒に働いているのですか？……手紙を下さい。そして、彼に、よろしくお伝え下さい。……家のWiktor兄さんは、結婚しました。結婚式は、2月18日に、Radziwieの教会で行われました。彼は、Poplacin出身のAntonina Oliszewskaさんと結婚しました。私は、彼女のことを知りませんが、Wiktorekの手紙によれば、彼女は、かわいい女性で、背の丈は中ぐらいの19歳ということです。彼女には、17

歳の妹と、10歳の弟がいるそうです。彼女の両親は、二人とも亡くなられたそうです。

・・・そして、両親は、富を残しました。1ウォルカ〔30モルグ〕の土地と、両親の死後売られた家畜の代金として1500ルーブル以上の現金。・・・この農場は、Vistulaのすぐそばにあります。そして、川の一部がこの土地に属しています。・・・その場所はとてもよいと、Wiktorekは書いています。そして、彼は、これらの富を十分に高くありがたがっています。彼は、思いがけなく実によい縁組みをしたと聞きます。私が休暇で家にいたときには、Wiktorekは、まったく女性とつき合っていないませんでした。それから、突然、彼は、結婚することを手紙に書いています。神様、どうぞ、新しい所帯の彼を祝福し給え。しかし、家の状態は、もっと悪くなりました。というのも、働くものが誰もいないからです。父は、私に、「挽回するために」、少なくとも半年の間、帰ってきてくれ、と手紙をよこしました。永久に家に帰り、この呪われた兵役から解放されるならば、私はうれしいです。しかし、兵役についているため、私に一体何ができましようか？ しかし、愛するStas兄さん、現在仕事が無く、〔メキシコと〕戦争になりそうなのですから、家に帰ったらどうかと助言させていただきます。どうぞ私に手紙を書いて下さい。どのくらいの間、アメリカに滞在するつもりですか？ Wiktorekは、以前、〔父の〕農場を引き継ぐつもりでした。・・・

Michal Markiewicz

手紙212番（p.515）で、Michalは、軍隊で農業学校出身の男と話ができて楽しいと書いているように、農民的な生活を好んでいる。この手紙の最後の部分は、「StasとMichalのどちらが、父の農場を引き継ぐのか」という問題を考慮に入れて、理解しなければならない（p.525fn）。明らかに、Michalは、農場をもちたいと思っている。というのも、Wiktorは、既に結婚して落ち着いているので、農場を引き継ぐ兄弟が、とりわけ父の態度ゆえに、大事にされるだろうからだ。したがって、Michalは、兄のStasが故郷に戻るつもりなのかどうか、Michalが農場を継いでもStasが反対しないかどうか、用心深く探ろ

うとしている。このように兄の意図を知ろうというずるがしこい努力と、Michal が、明らかにStasを愛していて、兄に家に戻ってきて欲しいという思いの混ざり合った感情がこの手紙224番には表れている。

これまで紹介してきた手紙の分析は、全体のごく一部に過ぎない。だが、わずかこれだけでも、農民家族の日常生活と近代化に適応する様子が生き生きと伝わってくるだろう。彼らの手紙には、当時の農民家族たちが直面する典型的状況が、彼らの視点を通して描かれている。その状況には、結婚や死などの伝統的状況から、移民や教育といった新しい状況まで含まれる。そして、その状況との関連において、伝統的な大家族から個人が析出されていく過程を見ることができる。これらの手紙は、今では入手不可能な貴重な資料である。家族史や、生活史研究、ナショナリズム研究など、これらの資料を用いたよりいっそうの分析が望まれる。

注

- (1) 高山 1999 ; 中野・高山 1999
- (2) 中野・高山 1999: 37-8
- (3) 以下、ページ数のみの表記は、Thomas and Znaniecki 1918-1920からの引用を表す。
- (4) Madge 1962: 55-7
- (5) 参照, p.400 ; ウラデク自伝の記述では、広告が掲載されていたのは、新聞『Dziennik Chicagoski』であり、手紙1通につき10から15セントとなっている。p.2222-3
- (6) この会議の内容については、Blumer 1939
- (7) 収録されている手紙には、1番から764番まで通し番号が打たれている。
- (8) 手紙中の[]は、トマスらによる要約・補足を表す。

(9) 手紙中の・・・は、トマスらによる省略を表す。

参考文献

- Blumer, Herbert. [1939] 1979. *Critiques of Research in the Social Sciences, I: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America."* [Social Science Research Council, Bulletin 44] Transaction Books. (桜井厚部分訳 1983 『生活史の社会学：ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』 御茶の水書房)
- 藤澤三佳 1997 「社会と個人——その解体と組織化：W・I・トマス, F・ズナニエツキ『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』」 宝月・中野編 1997
- 宝月誠・中野正大編 1997 『シカゴ社会学の研究：初期モノグラフを読む』 恒星社厚生閣
- Madge, John. 1962. *The Origins of Scientific Sociology*. Free Press.
- 中野正大・高山龍太郎 1999 「『ポーランド農民』における第一次集団論（その1）」 京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』47号
- 高山龍太郎 1997 「変動期のパーソナリティ形成：『ポーランド農民』における生活史法」 京都大学文学部社会学研究室 『京都社会学年報』5号
- 高山龍太郎 1999 「『ポーランド農民』における第一次集団論（その2）」 富山大学経済学部『富大経済論集』45巻2号
- Thomas, William I. and Florian Znaniecki. [1918-1920] 1974. *The Polish Peasant in Europe and America*. Octagon Books. (桜井厚部分訳 1983 『生活史の社会学：ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』 お茶の水書房)

付記 本稿は、平成12年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

